

【研究ノート】

古代「エミシ」の社会構造 —7-8世紀の北東北における社会実態—

グルコフスキー アレクサンダー

要旨：本論文は、6世紀末から11世紀にかけて現在の東北地方に住んでいた、「エミシ」と呼ばれた集団に関するものである。物質文化の側面から「エミシ」の社会構造を具体的に検討する。先行研究として、工藤雅樹氏は「エミシ」を「部族社会」と特定し、八木光則氏は北上川流域における集落遺跡・埋葬群を中心とする地域社会を研究し、中央集権化と階層化の傾向を明らかにした。更に、齋藤淳氏なども地域ごとの集落遺跡を分析し、人口の変動を記述している。本論文では、アメリカの文化人類学者 M.サーリンズ氏の「部族社会」の分類を使用して、包括的に北東北の集落遺跡と埋葬群を比較分析する。7世紀に出現した遺構群を主な対象とし、特に竪穴住居跡と末期古墳の構造や埋葬の特徴を詳細に考察している。また、7世紀の北東北における移住と地域の特徴についても分析しており、南東北や北関東からの移住波や、移住者と在地社会との交流が重要な要素であるとされる。具体的な例として、青森県八戸市の田面木平 (1) 遺跡や岩手県胆沢郡金ヶ崎町の上餅田遺跡などが挙げられ、これらの遺跡の構造や規模、遺物の特徴を詳細にする。本論文の結論として、北東北の7世紀の社会は、サーリンズ氏の分類に適合し、多様な社会構造を持つことが示された。そして、地域ごとの移住シナリオや物質文化の違いが、北東北の古代社会の多様性を形成していたことを明らかにした。

キーワード：古代エミシ、北東北、社会構造、M.サーリンズ

1. はじめに

一般に、「エミシ」とは、6世紀末から11世紀頃にかけて、現在の東北地方の地域に居住していたグループと定義される。一方で、そのアイデンティティや出自などの詳細については、いまだ不明な点が多い。この点に関しては、次の2つの仮説が挙げられている。一つは、文献資料の分析と北東北におけるアイヌ語地名の存在に基づき、「エミシ」を日本列島北東部のアイヌ語系先住民族、すなわち現代アイヌの祖先の一部とする「アイヌ説」である。もう一つは、考古学的研究の結果に基づき、「エミシ」は大和言葉を話す人々であり、古代日本国家の周辺に住んでいたものの、政治的な理由で大和朝廷によって分類された人々であるとする「非アイヌ説」である。これらの仮説に関わらず、「エミシ」の物質文化が北東北で出現した7世紀から8世紀の時期に、彼らの住む地域が古代日本国家の領域外にあったことは事実である。そのため、古代国家の社会構造とは異なる社会が存在していた可能性が示唆される。しかし、こうした特徴を文献資料から読み取ることは困難であるため、本研究では物質文化の観点からこの課題に取り組みたい。

2. 先行研究

北東北における古代の集落と埋葬の分布から社会構造を想定する研究は、岩手県北上市の五条丸古墳群および北上川中流域の周辺集落を分析した伊藤博幸氏と林謙作氏の論文に始まる(林1978;伊藤1987)。彼らの研究は重要ではあるが、その後の新たな集落や墳墓の発見により、比較的古いものとなっている。該当地域と時期の社会構造研究における主な研究者として、工藤雅樹氏と八木光則氏が挙げられる。工藤氏は、「エミシ」とローマ

帝国周辺のゲルマン人集団との類似性を指摘し、国家との関係を基に、アメリカの文化人類学者 E.サーヴィスによる「部族社会」の分類に「エミシ」を位置付けている（工藤 2019：210）。八木氏は工藤氏の研究を継承し、「エミシ」を同様に「部族社会」として位置づけ、古代北東北における物質文化と社会構造の変化を分析した。その結果、律令国家の影響が拡大する中での中央集権化と階層化の段階的な進展を明らかにした（八木 2010）。特に北上川上・中流域の集落を分析し、独自の社会構造分類を提唱している。八木氏と並行して、宇部則保氏は青森県太平洋側の集落を分析し（宇部 2019）、齋藤淳氏は 7～8 世紀の北東北における人口動態に加え、9～10 世紀の集落動態も考察する包括的な地域間分析を行った（齋藤 2019）。

一方で、これらの研究には東北北部全域の集団に適したシステムのアプローチが欠落している点が指摘される。例えば、多くの研究が特定の地域や遺跡に焦点を当てている。また、地域間の特徴を強調しようとする際、現在の都道府県や市町村の境界線に基づく分類が用いられることが多いが、これが実際の集団や文化的分布と一致しない場合もある。

3. 方法

本論文では、比較分析の手法を用いて研究を進める。対象とするのは、集落遺跡と埋葬遺跡といった物質文化の複合体であり、これらさまざまな分類モデルと照らし合わせて検討する。主な分類モデルには、アメリカの文化人類学者 M.サーリンズが提唱した「部族社会」の分類を使用する。また、新進化主義的アプローチは、古代北東北社会の研究において頻繁に適用されており、特に八木氏や工藤氏の先行研究では、E.サーヴィスによる社会分類が参照されている。一方で、新進化主義的アプローチは、文化人類学者、特にポストモダン研究者から批判されることも多い¹。その理由として、文化における「進歩」という概念の曖昧さや、異なる社会での文化的発展のプロセスを直線的かつ普遍的に捉える点が挙げられる。また、「部族」という用語自体が差別的とみなされる場合があり、特に先進国とは異なる地域の民族集団が「未開」「野蛮」と表現されることへの批判がある（Lowe et al. 1997）。

しかしながら、ポストモダンのアプローチとは異なり、新進化主義は多様な社会構造をモデル化できるという利点があり、これに基づいて集団間の違いを明確に示すことができる。この場合、「部族」は単に血縁関係に基づく集団として捉えるのではなく、国家とは異なる文化的、政治的、経済的構造として理解されるべきである。「エスニック・グループ」や「チーフダム」といった用語では、こうした枠組みを十分に説明することは難しい。

そのため、新進化主義的アプローチは古代北東北社会の研究において有効性をもつと考えられ、八木氏の先行研究においても E.サーヴィスによる社会分類が適用されている。本稿でこのような「時代遅れ」ともみなされる可能性のあるアプローチを採用した理由は、国家成立以前の段階における古代北東北社会の構造をモデル化し、その変遷を提示・比較するためである。

「部族」における血縁関係については、該当時期の文献資料や考古資料が少ないため、厳密な定義は困難である。しかし、分類の理論的モデルに基づき、その存在を想定することとする。

このような分類の中で、「部族」は、単一の始祖を持つ複数のリネージを含むとされ、

これらは単位集団として位置づけられている。サーリンズ氏は、「円錐型クラン」、「分節的リニージ体系」、「地域的クラン」、「分散クラン」、「地域的無型出自集団」という5つのタイプに分類している（Sahlins 1968）。

また、八木氏の北上盆地における集落構造の分類も重要な参照資料である。物質文化の中で特に顕著な要素として、カマド付き竪穴住居跡と末期古墳を中心に使用していることが挙げられる。考察と比較の対象地域としては、八戸市と盛岡市が最も適当である。

根本的に、ローカル分類は、八木氏の分類に基づいて行う。八木氏によれば、集落内部では、住居が集合し、一団となる地区が複数形成されることが多いという。この構造に基づき、すべての地区は4つのタイプに大別される（八木 2019 : 40-41）。さらに、住居規模の比率によってサブグループが形成され、地区の構造が単位集団を表現する。単位集団は2棟以上の住居で構成され、経済的単位とされている。ただし、小規模な集落（竪穴住居跡が10か所以下）の場合、集落全体が1つの地区として扱われることもある（表1）。

さらに、7～8世紀頃の北東北における末期古墳という埋葬遺跡と集落遺跡の相関関係や分布は、地域や成立時期によって異なる状態を示している。五十嵐聡江氏による末期古墳の分布（五十嵐 2005 : 39-42）の解明から、4つの遺構相関関係のパターンが確認されている（表2）。

4. 分析対象

本研究の分析対象は、7世紀に出現した北東北の太平洋側に分布する集落遺跡と、末期古墳という埋葬施設である。北東北の古代物質文化において、末期古墳は独特な埋葬施設であり、同時期に造営された終末期古墳と比べて小規模な埋葬である。構造的な特徴から、末期古墳は次の2つのタイプに別類される。一つは土壇タイプで、先に埋葬施設を造り、後から墳丘を築造する型式である。主体部は、木棺を用い、側板を四辺すべて、または短辺のみ埋め込み型で構築される。もう一つは石室タイプで、石室内部に木棺を直接埋葬する型式である。このタイプは規模が小さく、玄門からの埋葬が困難であったため、天井を閉じる前に埋葬した可能性が高い。横穴式石室のような追加埋葬は行わなかった（藤沢 2015b : 203-207）。

また、竪穴住居跡は、末期古墳とほぼ同時期に北東北の集落で出現している。これらの住居は一般的に隅丸方形で、壁の一辺にカマドが設置されている。竪穴住居の規模については、八木氏が提唱した小～超大の五段階分類（表3）が利用されている（八木 2010 : 68）。

さらに、該当時期の遺物としては、「北部栗罎様式」の土器、鉄製の刀や鎌などの武器・武具、轡などの馬具、玉類などの装身具が見られる。

表 1. 集落内部の住居構成（八木分類による）

	A	B	C
1	1~2 棟の特大形住居を核に大~小形住居 4~5 棟と共存	少数の大~小形住居で構成	特大形住居が単独で存在
2	1~2 棟の特大形住居を核に大~小形住居多数と共存	多数の大~小形住居で構成	大~小形住居のみで構成
3	複数の特大形住居が散在し、まわりの大~小形住居と共存		
4	複数の特大形住居が集中し、まわりの大~小形住居と共存		

表 2. 遺構相互関係パターンの一覧表

	末期古墳群の有無	末期古墳群に当たる集落遺跡の件数	集落遺跡に当たる堅穴住居跡の棟数	地域分布	時期
パターン A	あり	1-2 件	1~20 棟	奥入瀬川流域 馬淵川下流域 三陸海岸中部 遠野川上流域 北上川上流域 北上川中流域	7c 前半 7c 末葉~8c 中葉 7c 中葉~8c 中葉
パターン B	あり	3 件以上	20~50 棟	馬淵川上流域 馬淵川下流域 奥入瀬川流域	7c 中葉~8c 中葉
パターン C	なし	3 件以上	200 棟まで	雫石川下流域	7c 末葉~8c 初頭
パターン D	なし	1-2 件	1~10 棟	三陸海岸北部 上北地域	7c 中葉~8c 中葉

表 3. 堅穴住居の規模一覧表（八木分類による）

小形	中形	大形	特大形	超大形
~15 m ²	15~25 m ²	25~40 m ²	40~60 m ²	60 m ² ~

5. 地域社会構造の背景：移住と地域特徴

本研究の分析に先立ち、7 世紀以降の北東北における定住集落や末期古墳の成立背景を明らかにしておく必要がある。最初の集落や埋葬が形成される主な条件として、7 世紀前葉から中葉にかけての南東北や北関東からの複数回にわたる移住の波、7 世紀後半以降の内部移住、および移住者と在地社会との交流・統合が考えられる。

八木氏は北東北各地域における文化的影響の差異を指摘する一方で、南東北や北関東からの移住の可能性については否定している（八木 2022 : 174）。一方、松本建速氏は、移住の可能性を詳細に論じているが、7 世紀の段階で多様な移住シナリオを考察しておらず、

6 世紀に目立った集落や埋葬が見られないことから、在地社会の存在を否定している（松本 2011：236-237）。

本論文では、物質文化のパターン類似性、在地社会との交流の可能性、主な生業の違いを基に、異なる移住シナリオを想定し、移住の性質を表形式で示す（表 4）。

表 4. 移住シナリオと内容

時期	出発地	目的地	特徴
6c 末~ 7c 初頭	北関東 (沼田盆地、足尾山地)	青森県南東部 (馬淵川下流域、 奥入瀬川流域)	少数、「単発的」 馬の飼育を中心
7c 前半~ 7c 末	南東北 (大崎平野、仙田平野)	岩手県南・中部 (北上川上・中流域)	「進出」 水田稲作を中心
7c 中頃~ 7c 末	青森県南東部	岩手県三陸海岸、 北海道石狩平野	詳細不明 末期古墳群より読み取れる

6. 時期・地域ごとの分析と結果

6-1. 7 世紀前葉～中葉の馬淵川下流域・北上川中流域

北東北における最初期の集落の一つとして、青森県八戸市の田面木平（1）遺跡が挙げられる。この遺跡は 7 世紀前葉～中葉に遡るとされるが、500m ほど離れた丹後平古墳群とは成立時期が相対的に異なるため、両者を直接結びつけるには問題がある。

田面木平（1）遺跡の集落規模は、発掘された地区の面積が約 3 万 m² に及び、東北南部の多くの集落が 1 万 m² を超えていないのに対し非常に大きい（図 1）。遺跡は標高 100m の高位段丘に位置し、馬淵川までの距離が 1.5km、八戸湾までが 5km であることから、水や水産資源が集落経済に果たす役割は大きくなかったと考えられる（八戸市教育委員会 1993）。

現時点で、田面木平（1）遺跡では竪穴住居跡 22 棟、竪穴遺構 6 基、土坑 2 基、掘立柱建物 2 棟が検出されている。住居以外の遺構はすべて集落周辺にあり、倉庫として使用されていた可能性が高い。集落は南区、中央区、北区の 3 つの地区に大別される。第 45 号住居はカマドの構造などが他の地区と大きく異なっており、おそらく新しい時期に属するものである。

住居の規模比率は特徴的であり、小形の竪穴住居跡は見られず、ほとんどが特大形で、全体の 41% を占める。さらに、規模や内部構造には大きな違いがない。したがって、3 つの地区のうち 2 つは、超大形・特大形の竪穴住居が集中し、それらを囲むように大形が共存する A4 型とみなすことができる。中央区では、超大形住居である第 56 号が核を形成する唯一の住居であり、A1 型に分類される。第 56 号住居は集落の長に属するものと推定され、周辺の大・中形住居の分布からも大規模な豪族の存在が示唆される。

全体として、田面木平（1）遺跡は相対的に均質であり、諸住居が単位集団を形成していない。また、住居間の平均距離が 10m と十分に離れており、個々の家族が独立した生活を営んでいたことを示している。このパターンは、関東北部で見られる穀物栽培や馬の

飼育を行う集団に類似している。これらの地域からの移住の可能性は松本氏によって指摘されている（松本 2011 : 63-64）。

7 世紀中頃以降、岩手県南部の胆沢川と北上川の合流点付近にも新たな集落が形成された。代表例として、岩手県胆沢郡金ケ崎町の上餅田遺跡（岩手県教育委員会文化課 1981）や、岩手県奥州市の石田 I・II 遺跡（公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2015）が挙げられる。上餅田遺跡（図 2）は宿内川と北上川が合流する地点に位置し、石田 I・II 遺跡は北上川左岸から 5km 離れた場所で、上餅田遺跡よりも南に位置している。これらの集落はいずれも、当時の東北地方に広がる古墳文化の北限に位置すると考えられる。

菊地氏は、古墳時代の東北南部の集落を、規模、階層構造の有無、構造の複雑さ（防御施設や区画施設、貯蔵施設の有無など）に基づき分類している（菊地 2010 : 279-283）。上餅田遺跡と石田 I・II 遺跡は、この分類の中で、東北南部に多い「落合タイプ」に類似するとされる（図 3 左）。落合タイプは、10 戸以上の中規模から大規模の集落であり、遺構の分布密度が薄い地区を持ち、階層的な上位にある個人や家族を示す遺構や遺物が確認されない点が特徴である。

胆沢川流域における集落は、落合タイプのように多数の堅穴住居跡が存在し、明確な階層が見られないことが特徴である。住居のほとんどが中大規模であり、古墳時代後期の東北南部社会の典型的な社会構造に対応している。

一方で、非典型的な点として、住居が比較的集中しており、1 つの集落内に特大形の住居が存在することが挙げられる。この特徴は八木氏の分類によれば、A2 型に相当する。

これらの集落は、構造的に複雑な樋渡台畑タイプに類似している（図 3 右）が、胆沢川流域の集落では倉庫などの機能をもつ施設がほとんどみられない。このような特徴は、東

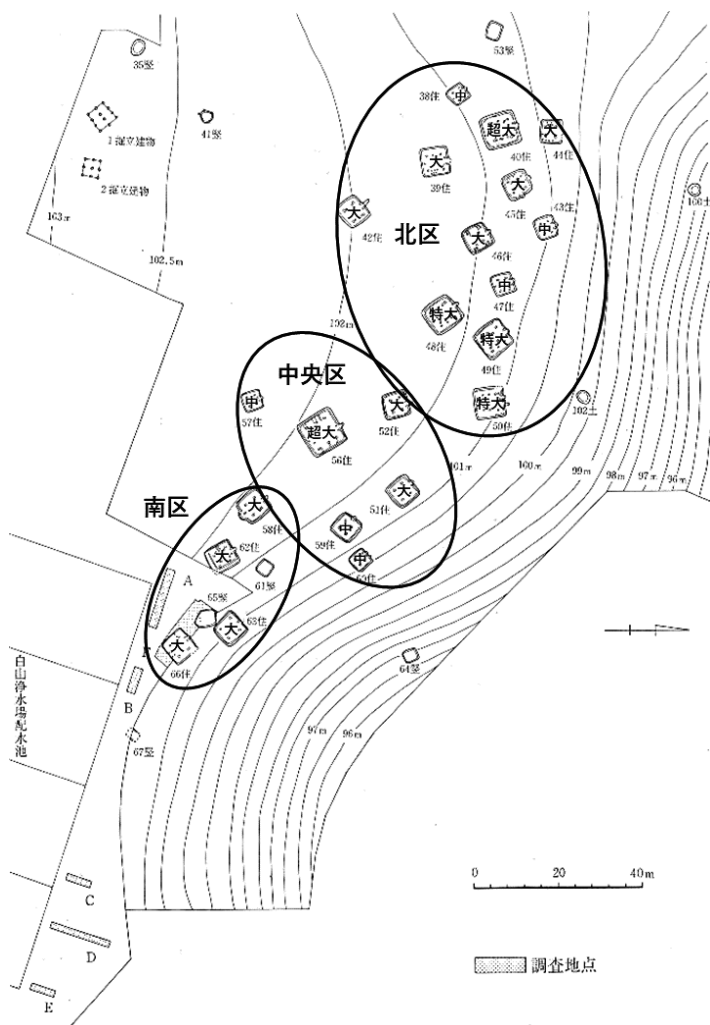


図 1. 田面木平(1)遺跡遺構配置（「八戸市教育委員会 1993」より改変）

北南部の集団が移住した結果であると説明できる。落合タイプは、農業・経済活動における地域の拠点的作用をもつ一方で、集落が政治的・軍事的拠点として扱われることはなく、集落内社会は相対的に均質である。しかし、移住によってリーダーが必要となり、リーダーを中心に集団が団結して移動する。

移住先では、蓄積された資源が少ないため、倉庫の建設が少なく、当初は住居が優先的に建設されたと考えられる。一般に、胆沢川流域における諸集落は統一された構造とつながりを持たず、稲作に基づく生活様式をもつ農業共同体として特徴づけられる。これらの集落は東北南部からの移住者による第一波とみなすことができる。

定住物質文化を残した最初の遺跡は、パターンAに相当する。集落内構造の観点からみると、パターンAは岩手県南部ではA2型、青森県南東部ではA1型またはA4型として特徴づけられる。これらの地域では、住居規模の比率が根本的に異なっていると考えられる。一方で、両地域に共通する特徴として、比較的平等な社会構造と、倉庫などの機能をもつ施設が少数である点が挙げられる。

東北北部における最初の定住集落を、以南からの移住者の出現と関連づける場合、これらの集落が階層性や一家族以上の単位集団といった安定した社会構造を持たないことが明らかになる。

集落内には、おそらく移住者を率いるリーダーが存在したが、他の移住者は比較的平等な立場にあり、必ずしも血縁関係を持つとは限らなかった。重要なのは、移住者たちが出自、移住前の生業、移住の経験を共有することで結束していた点である。

このような非構造的かつ平等な集団は、共通のアイデンティティによって団結しており、最初のパターンAの地域は「分散クラン」に類似するといえる。サーリンズ氏によれば、このような「クラン」は集団ではなく、共通の要素によって結ばれた人々のカテゴリーとして扱われており、階層性や支族系統は存在せず、極めて平等なグループである (Sahlins 1968 : 53)。

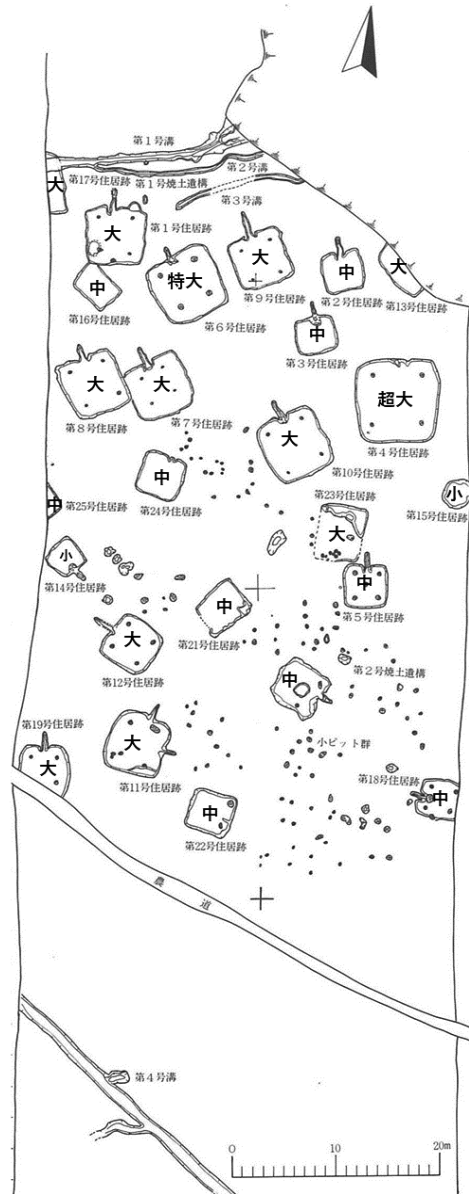


図 2. 上餅田遺跡遺構配置(「岩手県教育委員会文化課 1981」より改変)

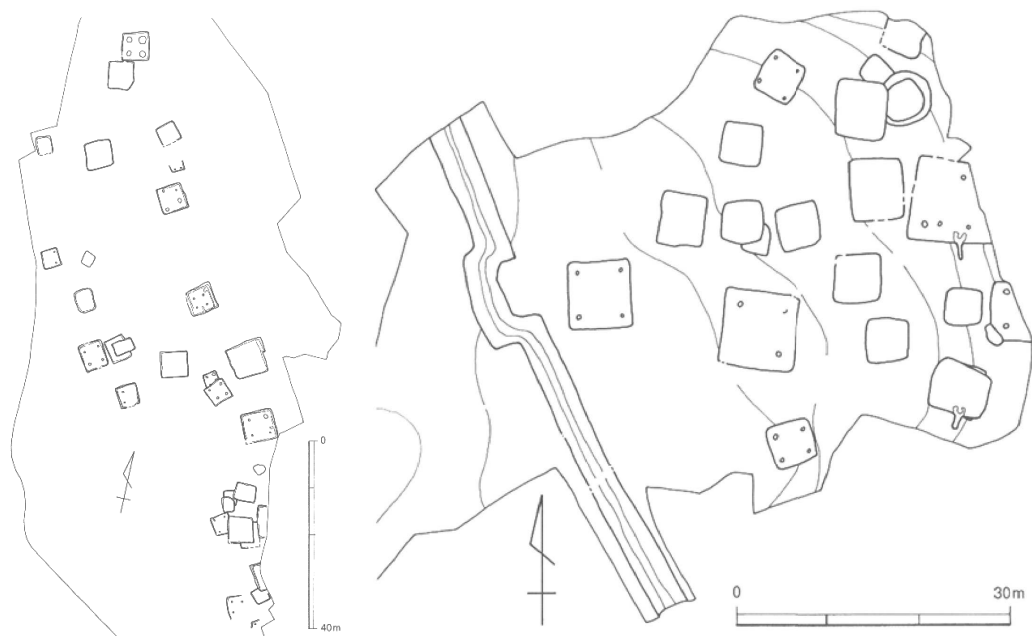


図 3. 福島県田村郡小野町落合遺跡(左)と河沼郡会津坂下町樋渡台畑遺跡(右)遺構配置 (菊地 2010)

東北北部における最初期の社会の分散性は、移住者の出発地における社会構造にも見られる。6世紀には、東北南部で中枢のリーダーの権力が衰退し(菊地 2010 : 324 ; 藤沢 2015a : 131-132)、このような集落は菊地氏の分類で落合タイプに属しているため、「地域クラン」、または「分散クラン」に取って代わられた。前述の通り、このような集落には明確な階層が存在せず、住居間には大きな空間があり、政治的・家族的な社会構造がみられない一方で、共通の生業によって結びついているといえる。

岩手県南部と青森県南東部の集落内構造の違いは、生業の違い、さらには出自の違いによるものと考えられる。東北南部の稲作農家は、灌漑、田植え、稲刈りなどの作業に集落全体が関わる必要があるため、集落が密集し、中央集権化が進んでいた。一方、関東北部からの移住者、特に穀物を栽培して段丘に居住していた集団は、世帯単位で自給自足の生活を営んでおり、共同耕作形態に転換することなく、自分たちだけで耕作していたと考えられる(高橋 1990 : 90-91)。

6-2. 7世紀後半～8世紀初頭の北上川中流域

7世紀末から8世紀初頭にかけて、北上川の中・上流において東北南部からの集団の伝播が続いた。この段階では、胆沢川下流域、和賀川下流域、豊沢川下流域に大規模な末期古墳群が出現しており、地域リーダーの制度が形成されつつあったことを示している。7世紀には土壇型の末期古墳が確認されるが、7世紀末から8世紀初頭には、青森県東南部で石室型の末期古墳が広く分布している。これと同時に、大きな集落が形成されていないことから、北上川中流域の社会はより階層的であり、集落間の距離が長いことから、それぞれの領域を支配する首長や氏族が互いに無関係であったと考えられる。

一方、例外も存在する。その中の一つが五条丸古墳群である(図4)。この古墳群には60基の古墳が含まれているが、付近には特大形・超大形の住居が多数存在する大規模な集落は確認されておらず、社会構造の解釈は難しい。しかし、規模や副葬品の差異が大きいことから、研究者は古墳をグループ化し、五条丸古墳群が関連する集落の戸主の集団埋葬の場であった可能性を示唆している(林 1978: 53)。

北上川中流域では、前の時代以来で、パターン A と集落構造の A2 型が基本的に保存されている。しかし、時期が進むにつれ

て社会構造はより複雑化し、ピラミッド型の性格を持つようになり、相対的に大規模な石室型末期古墳の古墳群が出現している。地域レベルでは、1 つ以上の集落を束ねる親族が現れるが、1~2つの集落に対して末期古墳の1群が対応するため、地域クラン間に直接的な血縁関係がある可能性はあるものの、その結びつきは強いとはいえない。

要約すると、この地域には地方クランが存在していたことが理解できる。そのリーダーの例として、胆沢の族長である大墓公阿弓流為が挙げられる。

6-3. 7 世紀後半~8 世紀初頭の北上川上流域

岩手県の地域におけるもう一つの例外は、盛岡市周辺、特に雫石川と北上川の合流地点である。ここでは7世紀後半から8世紀前半にかけて、北東北最大の向中野集落群が形成され、本宮熊堂 B 遺跡、野古 A 遺跡、飯岡沢田遺跡、飯岡才川遺跡、細谷地遺跡、南仙北遺跡、向中野館遺跡、さらに最大規模の台太郎遺跡が含まれる。この集落群における構造は、八木氏によって詳細に記述されており、特に台太郎遺跡を5つの地区に分け、その最大地区は複数の特大形住居が散在し、周囲の大小形住居と共存するという A3 型として捉えられている(八木 2019: 43)。

隣接する野古 A 遺跡と本宮熊堂 B 遺跡は、A2 型および A3 型、つまり、2 棟以上の特大形住居と多数の大小形住居が共存する構造で特徴づけられている(八木 2019: 49-51)。一方、その他の集落は、B1 型に分類され、少数の大小形住居で構成される点が特徴である(八木 2019: 60)。これらの集落は、集落群全体の中で拠点的な役割を担っていないことを示唆している。

台太郎遺跡(図 5)は集落構造の中で拠点的な役割を担っている。この集落には、当時の北東北で最大規模とされる RA613 住居跡があり、93 m²の面積をもつ。この住居からは、

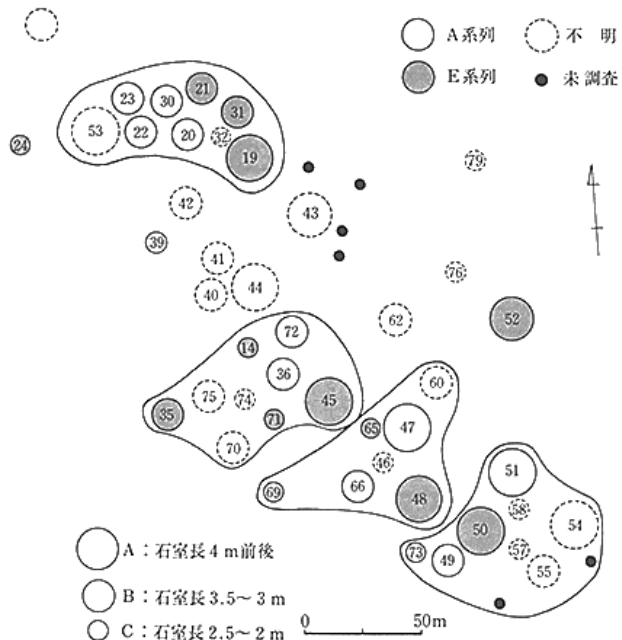


図 4. 五条丸古墳群の支群構成(林 1978)

土師器、須恵器、刀子、管玉、ガラス玉、土玉など計 56 点に及ぶ豊富な物質文化財が出土している。これにより、RA613 が単なる住居ではなく、おそらく集落群全体のリーダーの住居であったことが示唆されている（八木 2019 : 43）。

さらに、台太郎遺跡の特徴として、小形住居の階層が広く、特大形住居を中心に人口密度が比較的高いピラミッド型の構造を持つ点が挙げられる。

この遺跡では、広範な氏族が集落内の階層を形成し、単位集団の基礎となっていた。これは盛岡市地域以外では確認されていない。

一方で、このような身分階層が存在していたにもかかわらず、7 世紀末から 8 世紀初頭の盛岡周辺には、大規模な古墳群はみられない。

その一方で、他地域では、集落群に明確なリーダーと幅広い豪族の階層を持つ超大規模な集落が形成されている例もみられない。おそらく、向中野集落群では、大規模なリーダーの権力が親族による古墳造営や豪族権力の主張を阻んでいた可能性がある。

盛岡市地域、特に向中野クラスターに相当するパターンは最も複雑な状態である。一方では、絶対的な指導者を頂点とする明確なピラミッド型の階層構造がみられ、単位集団を支配する大規模な支族の存在は、「円錐型クラン」を示唆している。他方では、「円錐型クラン」は、システムの基礎となる大支族が形成されるまでに時間を要し、1～2 世代で形成されることはほとんど不可能であると考えられる。

このような集落群がどのように形成されたのか、村長と家長との間に血縁関係があったのかについては、現時点で明確に解明できない。ただし、おそらく血縁関係の不在が、大規模な墳墓群の不在と関係している可能性がある。

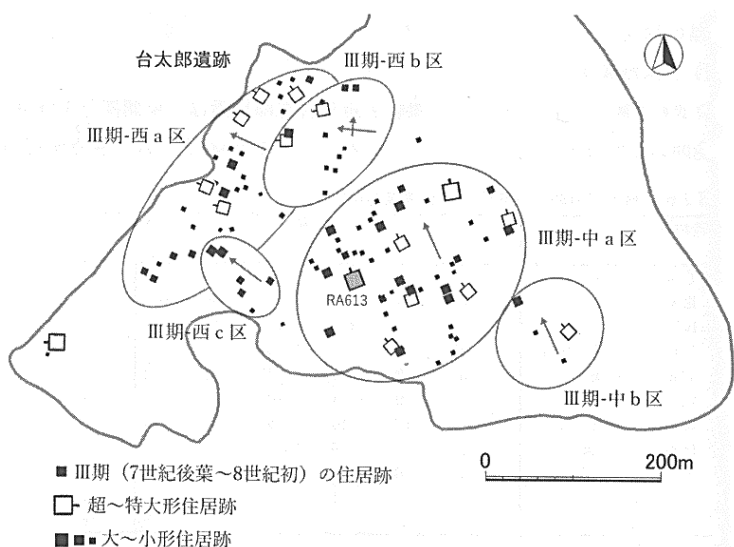


図 5. 7 世紀後半～8 世紀初頭における台太郎遺跡の竪穴住居跡の分布（八木 2019）

6-4. 7 世紀後半～8 世紀初頭の奥入瀬川・馬淵川下流域

青森県南東部では、7 世紀後半になると、田面木平 (1) 遺跡が放棄され、集団は北に移動した。その結果、田面木平 (1) 遺跡の北西 1km に位置する田面木遺跡、盲堤沢 (3) 遺跡、酒美平遺跡が一群を形成した。新たな集落は馬淵川に近づいているものの、流域には位置せず、50m の高位段丘にある。この位置や馬の飼育の痕跡から、新たな集落群は以前の経済的基盤を維持していたと結論づけることができる（宇部 2019 : 19-20）。

住居に関しては、大・中・小規模の住居が著しく増加し、超大形の住居はほとんどみられない。大部分の住居は中・小形であり、特に盲堤沢 (3) 遺跡（図 6）では、中・小形

が全体の 86%を占める。

社会構造も変化し、田面木平 (1) 遺跡が特大形住居群を基盤としていたのに対し、新たな集落では、田面木平 (1) 遺跡の A1 型のように特大形住居 1 棟を中心に大形・中形・小形の住居が集中している場合がある。また、特大形住居が核を形成せず、大形・中形・小形の住居が地区を構成する B2 型もみられる。前者には、田面木遺跡と酒美平遺跡、以北 500m の法霊林遺跡、および以東 6km の新井田川左岸に位置する市子林遺跡が含まれる。後者には、盲堤沢 (3) 遺跡、以東 5km 離れた新井田川右岸の田向遺跡と田向冷水遺跡の集落が該当する。

7 世紀後半から 8 世紀前半の集落構造は、いずれも住居数が多くなく、規模比率がピラミッド型である。大規模住居の周囲に小規模住居や非住居建物が集まり、住居間の距離が相対的に大きい (10~20m) という特徴をもつ。つまり、青森県東南部では、家族数が少なく、平等的な社会構造が集落内で形成されていたことが特徴である。また、貯蔵建物が集落の郊外から内部へ移動している点も顕著である。これは単位集団の出現を示し、特大形または大形の住居 1 棟、中形・小形の住居 1 棟以上、倉庫 1 基以上を含む構造がみられる。

7 世紀後半以降の馬淵川下流域における集落を、該当地域最大の丹後平古墳群と関連づけると、古墳の数と規模から判断して、これらの古墳は集落の長だけでなく、リニージ全体、すなわち単位集団の長に相当する可能性が高いと結論づけることができる。丹後平古墳群が田面木平 (1) 遺跡より後に形成されたことを考慮すると、この古墳群に埋葬されている人々は、特大形・大形住居に住んでいた単位集団や集落の長に属していた可能性が高い。

一方で、7 世紀後半の段階において、青森県東南部のすべての集落を統率するリーダーがいた拠点集落を特定することはできない。おそらくこの地域における集団の統一は政治的なものではなく、血縁や文化的つながりによって保たれていたと考えられる。

7 世紀後半、青森県南東部の人口は、初期の限定された定住地から、馬淵川上流域、新井田川下流、三陸地方へと広がっていった。このような集落はパターン B と定義される。これらの地域では、共通の祖先や氏族の結びつきが持続していたことが、丹後平古墳群、阿光坊古墳群、長根 1 遺跡、房の沢 IV 遺跡の大規模な古墳群によって証明されている。

一方で、馬淵川と奥入瀬川流域の最初の集落にさかのぼる可能性のある血縁や文化的統



図 6. 盲堤沢 (3) 遺跡遺構配置図 (「八戸市教育委員会 2002」より改変)

一が存在していたにもかかわらず、これらの支族内では古墳の規模や副葬品の面で際立った共通のリーダーを持つ親族構造は形成されていなかったと考えられる。それぞれのリーダー豪族は、つながりや伝統を保持しながらも、親族に従属することなく独自の領域を支配していた。このため、これらの集団は「分節的リネージ体系」を形成していたといえる。

サーリンズ氏はこのようなシステムを相対的に簡単なものとして説明している。しかし、青森県南東部とその隣接地域の場合、社会構造は必ずしも簡単なものではなく、これらの人々の経済構造の基本的な形態や、在地社会の比較的高い人口密度に適応したものであった。サーリンズ氏によれば、分節的リネージ体系は、近隣地域の弱小集団の居住地に拡大する可能性に対する適応的な反応である可能性があるという (Sahlins 1961 : 340)。

リネージ分節では、親族系統が容易に分裂し、さらに遠方の敵集団を征服することで、自身の文化の影響力を拡大することが可能になる。東北北部の状況において、移住者と在地社会との間に衝突があったかどうかを判断するのは難しい。一方で、移住者が放牧馬や狩猟場、交易のための新たな土地に関心を抱いていたことは明らかである。交易のため、親族関係が分離し、在地社会のコンパクトな居住地まで進出することが可能になった。このように、東北北部の地域集団の古墳文化系物質文化は北海道でも発見されている。

6-5. 7世紀後半～8世紀初頭の他地域

同時代においても、青森県南東部やその近隣地域のすべての集落がパターン B に該当するわけではない。多くの場合、パターン A が維持され、周縁の集落ではパターン D がみられる。パターン A の存在は、根本的に異なる社会構造の形態を示すものではなく、移住過程における継続的な流れにすぎない。新しい地域では、安定した社会構造がいまだ形成されていないものの、馬淵川上流域や三陸地方では「地域的無型出自集団」に類似する構造が現れた可能性がある。

一方、パターン D が観察される場合、リネージが政治的に重要でないことを示唆している。このような集落では、B1・B2 型という社会構造が支配的であり、大形から小形までの住居が比較的均等に分布していることを意味する。こうした小規模な共同体では、住民が互いに血縁関係を持ち、単位集団のレベルでは、大形から小形の住居を束ねた大家族構造が存在していた。集落内に明確なリーダーがいない共同体は「地域親族グループ」と呼称できる。これらのグループは、移民によって押しつけられた社会構造に適応できなかった在地社会と考えられる。そのため、移民が到着する以前に形成された安定した親族関係に基づきグループ化されていたと推測される。

7. おわりに

本稿の分析は「古代エミシ」の社会に関わる研究の一部に過ぎず、一般的な結論を出すには至らない。しかし、小括として、北東北の社会は、最初の分散クランに類似する構造から、多様な構造へと展開し、集落や集落内の住居や古墳群の埋葬分布に差異をもたらしたと結論づけることができる。7世紀後半から8世紀初頭における社会構造の状態モデルを図表にまとめた(図7)。

一方、隣接する南東北や北関東では、このような構造の多様性はみられない。これらの地域では社会構造の分散化が進み、最終的に7世紀末には、律令国家の政治圏に吸収され

ることとなった。したがって、北東北におけるこのような多様性は、6世紀末から8世紀前葉にかけての北東北の社会構造における独自性といえる。こうした独自性は、南東北や北関東からの移住者の役割を否定するものではない。移住者の自己認識は、最初の居住地において最も顕著であるが、移住経験や目的地の自然的・社会的条件によって、特別な自己所属意識が大きく規定されている。

しかし、依然として多くの点が不明であるため、地域の物質文化に関するさらなる研究が必要である。

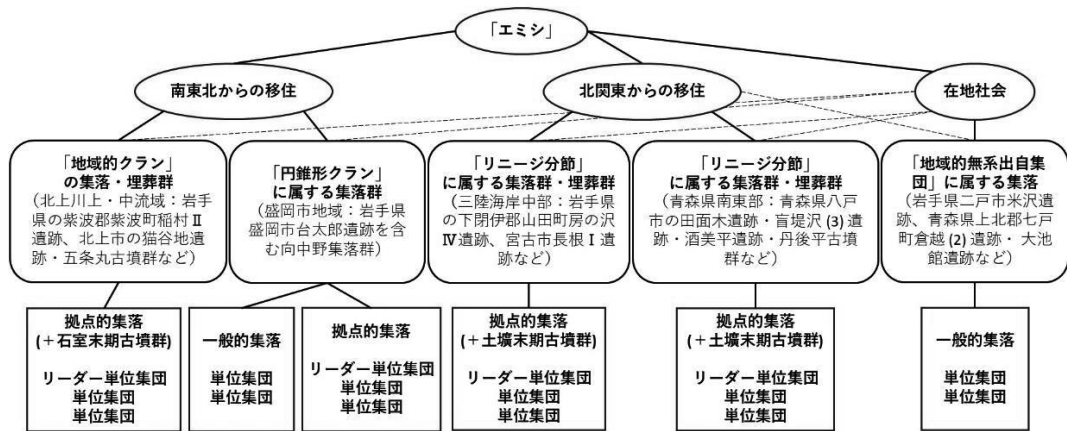


図 7. 東北北部における社会構造のモデル

注

- 1 新進化主義的なアプローチの批判に関しては、Carneiro R. L. 2003 *Evolutionism in Culture: A Critical History*, Westview Press, Boulder, CO. や Sanderson S. K. 2007 *Evolutionism and its critics: Deconstructing and reconstructing an evolutionary interpretation of human society*, Routledge, New York, NY. などに具体的に証明がある。

引用文献

五十嵐聡江
 2005 「「末期古墳」の展開とその社会的背景（下）」『筑波大学先史学・考古学研究』16: 31-60.
 伊藤博幸
 1987 「七・八世紀エミシ社会の基礎構造」岩手史学会（編）『東北の歴史と文化』熊谷印刷出版部、盛岡、27-62.
 岩手県教育委員会文化課
 1981 『岩手県文化財調査報告書 60：東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書 XI』岩手県教育委員会文化課、盛岡。
 宇部則保
 2019 「古代都母の地域様相」北東北古代集落遺跡研究会（編）『北奥羽の古代社会 —土器変容・堅穴建物と集落の動態—』高志書院、東京、9-34。
 菊地芳朗
 2010 『古代時代史の展開と東北社会』大阪大学出版会、大阪。
 工藤雅樹
 2019 『蝦夷の古代史』吉川弘文館、東京。

公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

- 2015 『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 632: 石田 I・II 遺跡発掘調査報告書』公益財団法人岩手県文化振興事業団・岩手県南広域振興局農政部農村整備室、盛岡。

齋藤淳

- 2019 「集落・竪穴建物動態から見た北奥古代史」北東北古代集落遺跡研究会（編）『北奥羽の古代社会 ―土器変容・竪穴建物と集落の動態―』高志書院、東京、97-142。

Sahlins M.

- 1961 *The Segmentary Lineage: An Organization of Predatory Expansion*. *American Anthropologist* 63: 322-345.

Sahlins M.

- 1968 *Tribesmen*, Prentice-Hall, Inc., Englewood Cliffs, NJ.

高橋一夫

- 1990 「集落の型態」石野博信、岩崎卓也、河上邦彦、白石太一郎（編）『古墳時代の研究—2 集落と豪族居館』雄山閣、東京、79-91。

八戸市教育委員会

- 1993 『八戸市埋蔵文化財調査報告書 53: 田面木平（1）・（2）遺跡』八戸市教育委員会、八戸。

八戸市教育委員会

- 2002 『八戸市埋蔵文化財調査報告書 92: 盲堤沢（3）遺跡』八戸市教育委員会、八戸。

松本建速

- 2011 『蝦夷とは誰か』同成社、東京。

林謙作

- 1978 「「五条丸古墳群」の被葬者たち」『考古学研究』99: 39-57。

藤沢敦

- 2015a 「不安定な古墳の変遷」藤沢敦（編）『倭国の形成と東北』吉川弘文館、東京、107-133。

- 2015b 「北東北の社会変容と末期古墳の成立」藤沢敦（編）『倭国の形成と東北』吉川弘文館、東京、195-217。

八木光則

- 2010 『古代蝦夷社会の成立』同成社、東京。

- 2019 「北上盆地の古代村落」北東北古代集落遺跡研究会（編）『北奥羽の古代社会 ―土器変容・竪穴建物と集落の動態―』高志書院、東京、35-66。

- 2022 「いわゆる末期古墳の系譜と変容」『国立歴史民俗博物館研究報告』232: 147-178。

Lowe C., Brimah T., Marsh P. A., Minter W., Muyangwa M.

- 1997 *Talking about 'tribe': Moving from stereotypes to analysis*. Background Paper 010 from Africa Policy Information Center, Washington, DC, 1-8.

（ぐるこふすきー・あれくさんだー／北海道大学大学院文学院）